

ミズーリ大学附属初等学校におけるJ.L.メリアムの実験に至る問題意識

西野 雄一郎

生活科教育講座

Awareness of Problems Leading Up to J.L. Merriam's Experiment at the University Elementary School at Missouri

Yuichiro NISHINO

Department of Living Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

J・L・メリアム (Junius L. Meriam) は1904年にミズーリ大学教育学部に赴任し、1905年からの約20年間はミズーリ大学附属初等学校の校長を兼任し、特徴的なカリキュラムに基づく実験を指導した¹⁾。

メリアムは、従来の3R'sの習得を中心に据えたカリキュラムや社会効率主義におけるカリキュラムが当時の急速な社会の変化に対応できていないことや、子供たちの素行不良の問題を引き起こす原因になっていることを批判した²⁾。だが同時に、「伝統的な3R's教材は、ただ伝統的であるというだけで、カリキュラムから無慈悲に切り取られるべきではない」³⁾とも主張している。

メリアムは、初等教育の目的は、「少年少女たちが通常従事する全ての健全な活動においてより良くあることを支援することであるべき」⁴⁾ だとし、現時点における子供たちの学校外での生活を豊かにすることを主目的として実験を指導した。子供たちによる興味に基づいた実生活に関わる研究の中で、3R'sは「生活のための遂行手段」⁵⁾ として自然に学ばれたのである。

ミズーリ大学附属初等学校の教師は、2, 3学年合同になることもある約35人の生徒のいる教室を受け持った⁶⁾。加えて、年間10ドルの安い授業料と入学試験を行わない点において、公立学校と同等の条件を備えた実験学校だったといえる⁷⁾。ミズーリ大学附属初等学校のカリキュラムは、従来の教科を廃止し、「観察」、「遊び」、「物語」、「手仕事」の4つの学科⁸⁾ で組織された。3R'sや従来の教科は、上記の4つの学科において実生活に関わる学習をする上でのツールと見なされた⁹⁾。このように、1クラスの数や授業料などが公立学校と同等の条件下にあり、且つ従来の教科を廃止し、3R'sを2次的にのみ学習されるものとしながらも、ミズーリ大学附属初等学校の卒業生は、大学へ入学するときの成績において、公立学校の子供たちを上回るほどの成果を見せたという。デューイら (John

Dewey & Evelyn. Dewey) は、『明日の学校』 (*Schools of Tomorrow*) において、このようなミズーリ大学附属初等学校でのメリアムの実験を評価している¹⁰⁾。

さて、我が国の生活科においては、「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」の育成が目指されると同時に、他教科における資質・能力育成との関連が重要視されている¹¹⁾。このような、「生活を豊かにしていく」中で他教科における意義ある学びの実現を目指す生活科の特質は、実生活を豊かにする学習の中で従来の教科等とのつながりを見せるミズーリ大学附属初等学校における当時の特質と類似点をもつ。また、生活科においては中学年以降の各教科等における資質・能力の基盤としての役割も期待されている¹²⁾。生活科は中学年以降、ひいてはその後の将来のための基盤にもなり得る。この点において、子供たちの実生活を豊かにすることを主目的とし、従来の教科内容の活用や将来への準備をあくまで2次的なものとしながらも、教科内容の習得や将来への準備を可能にしたメリアムによるミズーリ大学附属初等学校の取組から得られる示唆は大きいと考える。メリアムの理論や実験に基づき、子供たちの今の生活を豊かにする中で、いかに将来のための実力を身に付けるのかを明らかにすることは、「活動あって学びなし」といわれる生活科学習のあり方についての有意義な検討へとつながるだろう。

I 本研究の課題と方法

メリアムの理論やミズーリ大学附属初等学校の特徴的なカリキュラムは、アメリカにおいて議論されることは少なかった。L.H.チデスター (Lori Hope Chidester) はメリアムと附属初等学校に関する博士論文の中で、メリアムの作業が歴史的に事実上見過ごされてきたことを指摘している。チデスターによると、メリアムについて言及する歴史学者はいるが、進歩主

義教育者の1人としての位置付けとして簡単に紹介されるだけだったという¹³⁾。

我が国においては、倉沢剛(1985)が『米国カリキュラム史』においてメリアムの学校を「デューイ学校・パーカー学校と並んで実験学校の先駆をなした」学校として紹介し¹⁴⁾、佐藤学(1990)が『米国カリキュラム改造史研究』において、「『社会効率主義』に対する批判によって成立した革新的な学校」として紹介している¹⁵⁾。しかし、いずれも幾多のカリキュラム理論や実験諸学校を対象とした研究であるため、メリアムの理論に基づく実験について詳細に論じるまでには至っていない。杉村美佳(2019)は、ミズーリ大学附属初等学校の4つの学科を参考にして奈良女子高等師範学校附属小学校の中合科学習を実施した木下竹次と訓導たちの実践について明らかにした¹⁶⁾。杉村は4つの学科を大・小合科学習の有機的接続のための中合科学習に援用する木下らの構想や実践とその成果について明らかにしたが、メリアムの理論や実験の詳細を明らかにしたわけではなかった。

したがって、メリアムの理論に基づく実験についての詳細を明らかにして論じていくことが当面の課題となる。「過去において、あることがいかにして、なぜそのようになされたのかを知ることは、現在の実践を明確なものにしたり、未来の実践を形づくったりすることにつながっていく」¹⁷⁾のであり、メリアムの実験の理論的根拠や実践について論じることにより、現在の生活科実践の意義を明確にし、未来の生活科実践を形作っていくことにつながると考える。

本稿はその研究の一環として、メリアムがミズーリ大学附属初等学校の校長としてカリキュラム実践をすするに至った問題意識について論じる。メリアムは従来の学校の慣行に対する問題意識に基づいて、ミズーリ大学附属初等学校で実験を行った。それはどのような問題意識だったのか。また、それに基づいてどのような学校をつくったのか。それらについて論じることで、メリアムの理論やミズーリ大学附属初等学校での実験についての研究の足がかりとしたい。

II 公立学校校長時代のメリアム

メリアムは、1895年にオハイオ州オバリン・カレッジを卒業し¹⁸⁾、教育者としてのキャリアをオハイオ州ウェイクマンにある中等学校(high school)の校長及びタウンシップの教育長として始めた¹⁹⁾。メリアムは、『子どもの生活とカリキュラム』(*Child Life and the Curriculum*)のまえがきにおいて、この中等学校の校長時代に出会った14歳のボビーという少年について回想している。ボビーは、発達の度合いが少し遅れているように見受けられたが、少年らしい笑顔を見せる子どもであり、作業と遊びの両方において、時間

を守り、規則正しく、そして信頼できる子どもだったという。しかしその少年は、その学年の終わりには学校で遊ばなくなり、勉強もしなくなった。ボビーは学校に来なくなり、町のギャングのリーダーとなった。メリアムにとっての「最初の教え子の1人」²⁰⁾であったボビーの急変は、彼に衝撃を与えたに違いない。

メリアムは、1920年の時点において、「この問題に関して、私はオハイオ州ウェイクマン、オハイオ州アクロン、ニューヨーク州オールバニーで、過去12年間はミズーリ大学教育学部の附属初等学校で取り組んできた」と述べている²¹⁾。メリアムはオハイオ州ウェイクマンで中等学校の校長を務めたその後、1898年にオハイオ州アクロンにあるスパイサー初等学校の校長となったが、わずか1年間をアクロンで過ごした後、翌年にはニューヨークに移り、1900年にはニューヨーク州立師範カレッジで教育学士を取得した。その後1902年にはハーバード大学で教育学修士を取得し、1902年からの1年間はハーバード大学で、1903年からの1年間はコロンビア大学で助教授を務めた。そして1904年には前年に開設されたばかりのミズーリ大学教育学部に教授として赴任した。尚、1905年にコロンビア大学で教育学博士の学位を取得している²²⁾。同年1905年には創設されたばかりのミズーリ大学附属学校の校長を兼任し、1924年までの約20年間、その特徴的な実験の指導にあたることとなった。その間、初任校勤務以来、ボビーのような生徒の学校からの離脱や素行不良の問題における原因解明にも取り組み、『子どもの生活とカリキュラム』が出版された1920年時点において、「私の大好きな生徒の態度変容の真相は今、はっきりとしている」と言明している²³⁾。メリアムは『子どもの生活とカリキュラム』第1章「生徒の学校」においては、その原因の一部として、生徒たちが通う学校における慣習の問題について取り上げている²⁴⁾。以下、「生徒の学校」を基本資料として、メリアムが抱いた従来の学校における問題意識について明らかにしていく。

III 子どもに対する共感的理解の欠如への問題意識

メリアムは、「子どもたちへの正しい理解は、子どもたち自身についての直接の研究か、子どもたちの素朴な活動が描写されている本を通して開発される必要がある」²⁵⁾として、子どもの素朴な活動が描写されている本を多く参照して当時の子どもが置かれている境遇を書き表した。それらの本の1つに、G.M.マーティン(George Madden Martin)著の『エミー・ルー』(*Emmy Lou*)がある。メリアムは、この本の1場面を引用しながら、当時の学校教師が子ども理解の視点に欠けていたことを書き表している。『エミー・ルー』の主人公であるエミーは百日咳を患ったため、初等学

校の入学式に出席できなかった。エミーが初めて学校に登校したとき、彼女が在籍する教室の70人の子どもたちは順調にアルファベットの a, b, c を習い終え、l, m, n, o, p においても繰り返し唱えて慣れ親しんでいる様子だった。エミーの担任教師であるクララ先生は新任から数年間をその学校で過ごしてきた若い教師であり、そのクラスでの71人目の教え子を歓迎する熱意はなかった。よって、クララ先生はエミーに対しては他の生徒が習ってきた数字をただひたすら写し取る指示を出すのみだった。エミーにとってはその数字が何であるのか理解できずに時が流れていった。エミーにとって、数字が何を意味するのか、なぜベルが鳴ると起立しなければならないのか、なぜクララ先生が怒っているのか、全てが理解できず、奇妙で、面白くなかった²⁶⁾。メリアムは、この物語の描写の全てが生活の真実ではないといいながらも、全ての子どもがエミーのようにあがいていると指摘している²⁷⁾。

メリアムは、エミーに対するクララ先生のような、子どもに対する共感的で正しい理解に欠ける学校教育者を問題視していた。メリアムによると、当時の教師や学校関係者は、学校マネジメント、子どもの心理学、教育方法、標準化されたテストなどの研究のための読書にはかなりの時間を費やそうとしていた。一般的に、教育力の発達はそのような教育書の読解と研究を通じて獲得されるべきだと考えられていたからだという。メリアムはこれに対して、まずそもそも教師たちの読書量は少なすぎて、それらに対する思慮が浅かったとし、また、それらの本のみを読むことは教師たちにとって深刻な不幸だと続けた²⁸⁾。それ故、メリアムは『エミー・ルー』のような子どもたちの現実の姿が描写されている作品を読むことで、教師が子どもに対する理解を促進することを推奨したのである。

子ども理解に無関心もしくは失敗している大人は学校関係者だけではなくなかった。メリアムは、『エミー・ルー』の他にも、子ども理解の欠如が示唆されるような作品をいくつか提示している。その1つに『少年であること』(Being a Boy) があり、この作品には農夫の息子であるジョンの農場での生活が描かれている。この本は著者である C.D. ワーナー (Charles Dudley Warner) の少年期をモデルに描かれた作品であるが、ワーナーは、「農業についての観念が彼らを楽しませるものとあまり違わなければ、ジョンは概して非常に良い農夫になるだろう。怠惰になってしまうのは、ある特定の方法で農業をすることが本意であるためである」と記述している。ジョンは、本当は、遠くにある牧草地に出向いて、牛に塩を与えなかった。ジョンは、1日中トウモロコシ畑を耕していたかった。一方彼の父親は、庭の草刈りを任せることが、ジョンにとっても楽でいいと思っていた。また別の場面で、父親はジョンに地下室でのジャガイモの発芽を指示したが、

ジョンはその作業が面白くなかった。父親にとっては農作業の全てが生きていく上で大事な作業であったのだが、ジョンにとってはその真価が理解されなかった²⁹⁾。

またメリアムが提示した別の本『現実の少年のリアルな日記』(A Real Diary of a Real Boy) には著者の H.A. シュート (Henry A. Shute) が父親の物置小屋の古いクローゼットから発見した少年時代の日記が掲載されている。その日記には、あるがままのシュート少年の日常が描かれている³⁰⁾。メリアムは、シュート少年が、泳げるのに泳げないふりをして父親をだました場面を取り上げて、「この描写は、多くの父親に当てはまるものである。つまり、少年の発達に追いついていないことを表しているのだ」と述べている³¹⁾。

メリアムによるこれらの本の提示は、以下のことを示唆する。すなわち、学校教育者を含む全ての大人は、大人の見地により、子どもに大切なことを教えようとする。しかし、エミー・ルーのように、その意味が理解できない場合や、農場の少年のように、ともしれば楽しいものとなるはずの農業を、大人の見地からの押し付けによって怠惰を招くものにしてしまう場合があるということである。また、シュート少年と父親との間に生じたずれは、大人の見地からの判断よりも、子どもはずっと発達していることもあるということを見せてくれている。メリアムは、『子どもの生活とカリキュラム』において、3章にも渡って伝統的なカリキュラムへの批判を展開している³²⁾。その詳細を論じるには紙幅が足りないが、ただ、その批判は伝統的なカリキュラムの内容そのものを批判しているのではない。むしろ彼はそれを尊重し、「私たちが現在の〔伝統的な〕カリキュラムを突然放棄するように公立学校にアドバイスすれば、それはあまりにも愚かである。それは過去—そして現在の英知に対するひどい侮辱である (亀甲括弧筆者)」といい、伝統的なカリキュラムから解き放たれることは不可能だとしている³³⁾。メリアムが問題視しているのは、伝統的なカリキュラムを実施する慣習のもとで、大人が子どもを共感的に正しく理解しない故に、エミーのような子どもが教科内容を理解できず、ジョンのような子どもが真の動機づけを得られず、シュート少年のような子どもが過小評価されて実力を発揮することのできないことだった。メリアム自身の運営した中等学校においても同様の問題を孕んでいた。メリアムは、自身の中等学校を指しながら、「その厳格な学校の勉強は、その少年〔ボビー〕に現実世界における創案の、自己決定の、真の探究の機会を与えていなかった (亀甲括弧内筆者)」と反省している³⁴⁾。

IV 子どもたちにとって不自然な学校への問題意識

メリアムは、子ども理解の欠如が、子どもたちにとっての学校を不自然な場としたことを書き表した。メリアムは子どもたちにとって自然な場は学校外にあるとする。「裏庭において、路地において、空き地において少年を探そう。リビングルームにおいて、グラウンドにおいて、公共スペースにおいて彼らを探そう。少年たちはどこでも、何をすることにおいても活発であることが見出される。」とメリアムはいう³⁵⁾。子どもたちが活発に遊ぶことに加えて、メリアムは子どもたちが学校の外では働くことも好きであることについても強調している。ただし、もしその仕事子どもたちに適したものであればという文言を付け加えてはいるが。新聞配達少年はそのビジネスにおいて、多大な努力を見せるし、使い走りの少年は任務を非常に迅速に遂行する。駅で働く少年少女は、荷物を運ぶ機会を捉えるために注意を払い、自己決定に任せて過度に働いてしまうほどだという。ボーイスカウトはもはや少年のための単なる遊びではなく、その組織は仕事と遊びの両方に取り組む傾向に仕向けられている。キャンプファイヤーガールたちは、彼女たち自身を社会貢献活動に捧げ、同時に自分たちの手仕事に細心の注意を払う。メリアムは、このような学校外での子どもたちの活発な活動を取り上げて、「大人の特定の願いや指示に制限されることなく、概ね自分自身に任せることにより、子どもたちは遊び心をもつと同時に実に熱心になる」と述べた³⁶⁾。

学校においては、子どもたちはそのように活発になれなかった。当時のほとんどの学校による抑圧は、現実の少年たちにとっての憂鬱であったとメリアムは述べる。メリアムのいう所によると、まさに教室の4つの壁が、子どもたちがあるがままの自由を要求するときには抑圧的な影響をもち、学校のグラウンドでさえ制限を与えるものだった。当時のしっかりと床にボルト留めされた机は、ほとんどの子どもにとって快適ではなかった。メリアムは従来の学校において子どもたちが抑圧される身体的動作の自由は、その動作が他人の権利を侵害しない限りにおいて、子どもたちから奪うことのできない権利であることを主張した³⁷⁾。授業においても、子どもたちは活動的な思考よりむしろ、大部分は受動的な学習を提供された。通常のレシテーション³⁸⁾において、現実社会の活動、とりわけ質問や指示に答えるだけのものよりもはるかに効果的であるとされる自発的な活動のための準備はあまりされなかったという。従来の授業は活動に対してむしろ制限的であり、学校外における子どもたちの活動とはあまりに対照的だった。メリアムが「従来の学校における生徒たちが行った仕事の典型」とするエミー・ルーの指示された数字の写し取りの仕事などの中で、学校外

では活発に遊び、仕事熱心な子どもたちが、学校においては無関心であるとあまりに頻繁に判断されたという。子どもは教室に入るとすぐに学校外の通常の性質を捨てた、もしくは学業によって不利な影響を及ぼされたという。メリアムは、このような学業が慣習となる中で、怠惰が勤勉の代わりとなり、悪い行いがしばしば健全な遊びの代わりとなったといい、従来の学校という場を子どもたちにとって、本質的に不自然な場であると言明したのである³⁹⁾。そのような不自然な場において、子どもたちは不当に評価される。算術のレシテーションに失敗する少年は、路上においては正確且つ迅速にお金のやりとりをすることができるかもしれない。また、地理が苦手とされる少年は、その都市に不慣れな人々に道案内ができる人であるか、その町の産業活動を教えることができる人かもしれない。これらの例を挙げながら、足し算や引き算ができるかどうかによって子どもたちの知能を測定することの深刻な危険性についてメリアムは言及した⁴⁰⁾。レシテーションで測られる算術の能力は、メリアムによると現実適用できるものではなかった。スペルの習得においても同じことがいえた。『現実の少年のリアルな日記』において、シュート少年は、賞品目当てにスペルを書くことを毎日繰り返した。スペルの習得は、シュート少年にとってはゲームでしかなかった。報酬による動機付けは、学校で頻繁に用いられるが、それにより子どもたち同士の競争を生む。メリアムは、教師からの報酬によって子どもたちは、昨日から今日に至る仲間同士の成長について励まし合い、喜び合う関係ではなく、他人を凌ぐために努力する動機付けを与える危険性があったとした。これも、学校という不自然な場で生じる問題である。メリアムは、これらの事例を取り上げながら、学校関係者が学校外における子どもたちの姿と学校を結びつける努力をしてこなかったことに対して批判したのである⁴¹⁾。

メリアムは、昨今多くの教師が現実世界と乖離した学業について危機感を募らせ、子どもに対する共感的理解の必要性を感じていると述べた。しかし、一方で、権威に任せられた横柄な管理がまだあまりにも一般的であるとも述べている。それは、主に課題の割り当て、レシテーション、テストの実施、そして平均化から成る指導であると主張した⁴²⁾。

V 学業に根付いている慣行への問題意識

メリアムによる課題の割り当てとレシテーションによる学業についての批判は、メリアム(1910)の「レシテーションと研究」に詳しい。メリアムは、伝統的な学校及び当時のほとんどの学校において、授業の時間はレシテーションの時間だったと言明している⁴³⁾。メリアムによると、あらゆる教科における学業は、①

教師による課題の割り当て、②生徒による学習（彼の座席、または自宅において）、③生徒による教師へのレシテーションに終始するという。これら3つは、暗黙のうちに想定されている以下の3つの原則に基づいているとされる。すなわち①教師の最初の作業は、生徒の学習内容の特徴や範囲を決定することであり、これは医師が患者に処方するのと全く同じように生徒に教える。②生徒は、割り当てられた課題についての個人的研究から主な利益を得る（教師とは別の誰かの思いやりや手助けによって利益を得ることは除かれる）。③生徒の研究の有効性は、通常はレシテーションと呼ばれる一種の試験によって非常に頻繁にテストされるということである⁴⁴⁾。ここでメリアムが特に問題としていることは、多くの教師が、①課題割り当ての提示を③のレシテーション期間の間近に与える傾向にあることである。あまりに多くの教師がこの深刻な問題を認識していないので、この簡略化された方法が頻繁に採用されるという。メリアムは、その例を以下のように示している。例えば「86頁から87頁の定義とルールを勉強し、87頁から88頁の練習をしましょう。最後の4つの問題は書いて持ってきてみましょう。」「本文の次の10頁を読みましょう。」「次の参照のいずれかを読みましょう。」「自分で描いた地図を提出し、当時の2つの軍の位置を見せましょう。」などの課題割り当てである。メリアムは、この割り当てに対して3つの異議を唱えている。第1に、そもそもここで用いられる教科書（text book）は、特許権をもつ医学に要求されるように全てに適しているとは考えられないということである。教科書は、論理的な配置で構成されており、すぐに参照できる優れたものであるが、個々の生徒や個々の単元に適しているわけではない。にもかかわらず、広範囲で教科書が用いられており、この教科書による機械的な割り当てが、結果的にクラスのニーズに適したより有益な割り当てを混雑させているという。第2に、このような教科書による機械的な割り当てこそが、教師の士気低下に影響する。教育を機械的で空虚なものにする傾向のもとで、課題の割り当ては重要な問題を解決するものであるよりむしろ、単なるタスクを与えるものになってしまうということである。第3に、教科書による機械的な割り当ては、生徒たちに不健全な影響を与えるという。生徒たちはこのような割り当てをしばしば、学校での骨の折れる退屈な仕事の中の恣意的なタスクとってしまうからである⁴⁵⁾。

メリアムは中等学校の約300人の生徒に2つの質問をし、回答を求めた。「①この授業時間の課題は何でしたか。②割り当てられた課題を勉強するためにあなたは何をしましたか。」⁴⁶⁾といった簡単な質問である。生徒たちの回答によって明らかになったのは、教師による課題の割り当てが生徒にあまり明確な印象

(impression) を与えなかったことである。課題の割り当ては、教師がどのように割り当てたかではなく、生徒がどのような印象をもったかによって判断される必要がある。課題の割り当てに印象をもたなかった生徒たちは課題意識を持たずに授業をこなしていくことになる。そのような単に割り当てられた課題において、生徒たちのほとんどはハードワークをしない。そうすべき強い動機が見当たらないので当然である。メリアムは「このような通常の学業の現状において、生徒たちの勉強への唯一の動機は、授業時間におけるかなり形式的なレシテーションに備えることである」といい、「嘆かわしい状況」だとしている⁴⁷⁾。そして「現在の学業の配置は、教師よりも他の誰かに実際の教授の負担を投げ、教師は主に、作られた進歩のために生徒をテストする者として機能する」⁴⁸⁾と結論づけている。

そのテストにおいて、学校は平均的、中間的標準が重要視される傾向にあった。大人は子どもたち1人ひとりの変化を観点とするのではなく、平均を観点として判断する。大人は、平均以上に位置する子どもと平均以下の子どもの2つのグループに分けて子どもたちを見る。メリアムによると、大人は個人の変化の観点よりもむしろ、平均の観点で判断しがちである。知的達成と道徳的行いの基準は、あまりにも一般において特定の経験から想定される結果に基づいている。これに対してメリアムが抱く深刻な危険性は、平均以下の子どもたちへの配慮である。メリアムは、平均以下と判断された半数の生徒たちの「クラスでの立場は、生徒の半数にとって非常に不愉快なものであり、したがって不利に割り当てられ、彼らがよりよい作業をするように刺激されることはない」と言明している⁴⁹⁾。

このように、メリアムは慣行となっている安易な課題の割り当て、レシテーション、テストの実施と平均化に対して痛烈に批判した。メリアムのいう所によると、この慣行のもとで学校や教師は、「実際のな教授に対する準備はほとんどしなかった」のである⁵⁰⁾。

VI 生徒による研究の重要性

これまで、メリアムの従来の学校や教師に対する問題意識について論じてきた。メリアムは、教師や学校の子どもに対する共感と正しい理解の欠如を問題視した。子どもたちの興味を無視し、子どもたちの学校外での生き生きと遊び、熱心に働く姿を考慮に入れず、機械的に課題が割り当てられ、それがテストされる慣行を批判した。その子どもたちにとって「不自然」な学校教育の中で平均以下とレッテルを貼られる子どもたちがいることも危険であるとした。これらの子どもにとって動機付けのない、意味を理解し難い学業が、ボビーのような子どもたちを学校から追い出したのだ

ろう。

先にも少し触れたが、メリアムは、自身の中等学校校長時代を振り返り、「私の大好きな生徒の態度変容の真相は今、はっきりとしていた。・・・その厳格な学校の勉強は、その少年に現実社会における創案の、自己決定の、真の探究を与えていなかった。」と表明している。ここでいう「現実社会における創案の、自己決定の、真の探究を与える」方法とは何だったのか。それが、生徒による研究(study)である。メリアムは、従来の慣行とは対照的であり、課題の割り当てやレシテーションを効果的なものにしなが、子どもたちの自然な姿を成長させることができるような方法としても、生徒による研究を重要視した。メリアムは研究について以下のように言及している。

研究とはどういう意味か。少年が小さな川の流れに近づく。彼はその川を越えたいと思っている。彼は本当の問題に直面している。彼は、不満足な状況から彼自身を解放し、向こう岸に移ることで、彼の道を進み続けることができる。彼は今、そのための方法と手段を考案しなければならない。これは研究である。自分の環境によりよく適応するための手段を身に付けるための意識的な精神的努力である⁵¹⁾。

研究は、受動的なものではない。従来の課題の割り当ては生徒を受動的なものとした。従来の割り当ての例としてメリアムは、「植民地間のより緊密な連合をつくるためにオールパニ会議がどのように貢献したかを見るために、104頁から112頁を読みましよう。」といった教師の指示を挙げている⁵²⁾。この104頁から112頁が生徒にとって意味のあるものになるためには、生徒たちが当時の入植者たちの間の不満がどのようなものであったのかについて疑問をもって能動的に調べる中で、必然的にオールパニ会議において連合がつけられる素地ができてきたことに行き着いたことが解き明かされた、その後の確認の場となることが望ましいといえるだろう。なぜならメリアムは、「課題の割り当ては、生徒にとって新しい資料ではない。クラスで既に行われた研究を補足するためにのみ必要である」といっているからである。メリアムは、生徒の研究により、課題の割り当てに加えてレシテーションも意味のあるものになるとしている⁵³⁾。各自が研究成果を報告する場をレシテーションとすることにより、「作られた」課題に対するレシテーションではなく、本当の問題に対するレシテーションとなるからである。尚、このレシテーションは、生徒たちを平均化の観点で見ると、個人のパフォーマンスによって評価することができるものだとはいえる。

さらに、生徒による研究の素晴らしい成果の1つとして、メリアムは研究が正しい学習習慣のトレーニン

グになることを強調している⁵⁴⁾。『少年であること』の農場の少年において、研究による正しい学習習慣が身に付いていたらどうなっただろう。少年は、トウモロコシ畑を耕す中で、牛に塩を与える中で、それらを成功させるための様々な課題に直面し、主体的に解決を試みたかもしれない。その中で、農業に関する環境に少しずつ適応し、農業に関する興味ある世界を広げていったかもしれない。『現実の少年のリアルな日記』におけるスベルの練習においても、『エミー・ルー』における数字の練習においても、それが研究による現実問題の解決の過程で必然的に重要であることを学ぶことにより、意味あるものになっただろう。

Ⅶ ミズーリ大学附属初等学校での試み

メリアムは、子どもにとってより自然な学校として、すなわち「少年少女たちが通常従事する全ての健全な活動においてより良くあることを支援する」学校として、ミズーリ大学附属初等学校が機能することを目的とし、子どもによる研究に重点を置いた試みを開始した。その学校は、開校した1905年からの2年間は伝統的教科の改造が研究されたが、それは不十分で建設的でなかったという⁵⁴⁾。「しばらくの間、伝統的教科であるリーディング、ライティング、算術、及びその他を勉強することを忘れよう。これらの伝統的教科を勉強することにより、私たち大人が現在の発達段階に到達したという観念を脇に置いておこう。私たちの生徒が私たちの辿ってきたコースによってのみ発達できると確信してはいけない」⁵⁵⁾として、メリアムはその学校における伝統的な教科を廃止した。そして1907年の終わり頃までには生徒による研究は便宜上4つの学科「観察」、「遊び」、「物語」、「手仕事」として配置された⁵⁶⁾。

その学校の構造は独特だった。建物は50フィート四方の2階建てで、地下室を有した。1階の半分にあたる「泉の部屋」と名付けられた多目的ホールは、自然の研究のセンターとして機能した。泉の部屋の壁は展示ケースで覆われており、全生徒の作品が展示された。この展示は常時されており、新しいプロジェクトで展示物が作られると、古いプロジェクトの展示物と替えられた。またその部屋は講堂としても機能した。席はなかった。訪問客のため以外には必要ないとされたからだ。集会があるときには、生徒が各々の教室から自分の椅子を持ってくる。この集会については後述するが、毎日ではなくても頻繁に行われた。集会が終わると、生徒は椅子を持って教室へと戻り、泉の部屋は再び民謡舞踊やゲームのための自遊空間となった。

2階には25×30フィートの図書館があった。ミズーリ附属初等学校は教科書を採用していなかったが、この図書館は実に約2500冊の書物を有し、どれも異な

る本だった。それらが生徒の教科書の代わりとなった⁵⁷⁾。また、図書館には生徒たちが作成した冊子が保管されていた。これらは、生徒の研究の成果物である。この成果物は、他の生徒の研究に役立つものだった。そのような役立つ物となるために、その作品は驚くほど個性的なものでなければならなかったという。学年が上がるほどに、その冊子には表現を明確にするための図面や写真の切り抜き、算術計算、地図、及び他の形式のイラストが含まれた⁵⁸⁾。

初等学校には、お店や科学機器はなかった。優れた図書館を有し、小旅行や野外活動に頻繁に出かけるので、学校の機器が少なくても深刻なハンデキャップにはならなかったという。このような一見不十分な設備は、多くの訪問者を驚かせたという⁵⁹⁾。しかし、この建物の使い方や設備配置は、生徒の研究を促すために有効な環境設定だったといえる。当時の学校に未だ見られたボルト留めされた机はなく、自由に使える空間があった。また、研究過程で情報を得られる広い図書館があった。さらに、泉の部屋の展示スペースや図書館で役立てられる生徒の成果物は、生徒のさらなる動機付けになっただろう。メリアムは、最初の大切な教え子だったボビーにはその環境を与えることができなかったが、ミズーリ大学附属学校の生徒には、「現実社会における創案の、自己決定の、真の探究」を与える試みを行ったのである。メリアムがその「生徒の学校」の主要な機能を5つに整理して提示したので、ここに紹介する。

- ①学校は、伝統的な教科である読み書き算やその他を研究しない。研究のための主題は学校外の生活から直接取得する。
- ②学校は教科書を使用しないが、遠足やフィールド旅行で行われた研究成果を保管するための図書館をもつ。
- ③学校には、以前行った課題について生徒をテストするためのレシテーションはない。代わりに会議がほぼ毎日設けられ、生徒はそこで図書館や特別な観察により得た発見をまとめて発表する。この会議は、生徒が行う多くの研究のために、めったに長引かせることはない。
- ④課業を準備するような課題の割り当ては行われぬ。そのような割り当ては、会議で発達するような、新旧様々な問題に基づく新しい教材によって置き換えられる。
- ⑤生徒が成してきたことを見取り、さらなる達成へと導くために、テストが利用されることはない。日々のワークは十分にテストを補うものであり、教師と生徒の協同研究は、見せかけの刺激よりも効果的である⁶⁰⁾。

メリアムがこのような実験を行うにあたっての彼へ

のアドバイザーは、附属学校の教師たちであり、彼と提携している公立学校の関係者であり、ミズーリ大学の学生であり、何百人もの来訪者や、学校の保護者たちだったという。メリアムは、学校の政策管理を運営する上での大きな自由を認められていたが、決して独り善がりな運営をしたわけではなかったのである⁶¹⁾。

註

- 1) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, New York: World Book Com-pany, 1920, pp.13-14.
- 2) *ibid.*, p.70.
- 3) *ibid.*, p.204.
- 4) *ibid.*, p.137.
- 5) *ibid.*, p.329.
- 6) J.デューイ・E. デューイ／増田美奈訳「12 明日の学校 第3章 自然的成長における四つの要素」J. デューイ／上野正道監訳『デューイ著作集 7 教育2 明日の学校, ほか』東京大学出版会, 2019年, 111～122頁。
- 7) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p.16.
- 8) メリアムは『子どもの生活とカリキュラム』において「観察」, 「物語」, 「遊び」, 「手仕事」を「subject」, もしくは「study」と表記しているが、従来の「教科」(subject)と「研究」(study)と区別するために、ここでは上記4つを「学科」とする。
- 9) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p.203.
- 10) J.デューイ・E. デューイ／増田美奈訳, 前掲書, 121頁。
- 11) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説 生活編』東洋館出版社, 2018年, 81頁。
- 12) 同上書, 6頁。
- 13) チデスターは学位論文において、進歩主義教育の歴史研究者たちがメリアムの仕事を見落としてきたことについて論じている。
Lori. H. Chidester, “Junius L. Meriam’s University Elementary School: Implications for Prevailing Interpretations of Curriculum Theories and Practices Past and Present,” unpublished Ed.D. thesis, University of Georgia, 2005.
- 14) 倉沢剛『米国カリキュラム研究史』風間書房, 1985年, 312～317頁。
- 15) 佐藤学『米国カリキュラム改造史研究 単元学習の創造』東京大学出版, 1990年, 105～115頁。
- 16) 杉村美佳「1920～30年代の奈良女子高等師範学校附属小学校における『合科学習』の課題と実践」日本教育学会『教育学研究』第86巻, 第3号,

- 2019年, 1～11頁。
- 17) S. B. メリアム・E. L. シンプソン／堀薫夫監訳, 「第5章 歴史的探求と哲学的探求」『調査研究法ガイドブック』ミネルヴァ書房, 2010年, 106頁。
- 18) 佐藤学, 上掲書, 1990年, 105頁。
- 19) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p. vi.
- 20) *ibid.*, p. v.
- 21) *ibid.*, p. vi.
- 22) 佐藤学, 前掲書, 1990年, 105頁。
- 23) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p. v.
- 24) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, pp. 3-18.
- 25) *ibid.*, p.5.
- 26) George Madden Martin, *Emmy Lou Her Book and Heart* [Kindle DX version]. Retrieved from Amazon.com.
- 27) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p.4.
- 28) *ibid.*, p.5.
- 29) Charles Dudley Warner, *Being a Boy* [Kindle DX version]. Retrieved from Amazon.com.
- 30) Henly A. Shute, *A Real Diary of a Real Boy* [Kindle DX version]. Retrieved from Amazon.com.
- 31) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p.5
- 32) *ibid.*, pp.21-69.
- 33) Junius. L. Meriam, “Fundamentals in The Elementary School Curriculum,” (1909), *Educational Review*, 37, p.395.
- 34) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, pp. v - vi.
- 35) *ibid.*, p.6.
- 36) *ibid.*, p.7.
- 37) *ibid.*, p.6.
- 38) Junius. L. Meriam, “Recitation and Study,” (1910), *The School Review*, Vol. 18, No. 9において, メリアムはレシテーションを, 既に獲得した知識を検査する場のこととしていたと捉えることができる。尚, 以下の文献におけるレシテーションに対する捉えも参照した。
森久佳「シカゴ時代(1894-1904年)におけるデューイの『レシテーション(recitation)』論の特色に関する一考察—デューイによる『学び(learning)のタイプ』のとらえ方に着目して—」『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』第67巻, 大阪市立大学, 2016年, 123-139頁。
- 39) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p.8.
- 40) *ibid.*, p.9.
- 41) *ibid.*, p.10.
- 42) *ibid.*, p.11.
- 43) Junius. L. Meriam, “Recitation and Study” , *op. cit.*, p.627.
- 44) *ibid.*, p.627.
- 45) *ibid.*, p.628.
- 46) *ibid.*, p.629.
- 47) *ibid.*, p.629.
- 48) *ibid.*, p.630.
- 49) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p.12.
- 50) Junius. L. Meriam, “Recitation and Study” , *op. cit.*, p.630.
- 51) *ibid.*, p.631.
- 52) *ibid.*, p.632.
- 53) *ibid.*, p.633.
- 54) *ibid.*, p.631.
- 55) Junius. L. Meriam, *Child Life and the Curriculum*, *op. cit.*, p.14.
- 56) *ibid.*, p.13.
- 57) *ibid.*, p.14.
- 58) *ibid.*, p.17.
- 59) *ibid.*, p.265.
- 60) *ibid.*, p.17.
- 61) *ibid.*, p.18.

本研究は令和2～4年度科学研究費若手研究（課題番号20K13869）「アメリカのK-2探究的学習理論・実践を活かした生活科探究的学習理論・指導法の確立」の成果の一部です。

(2020年9月24日受理)